

「立ち上がり、歩きなさい」

イザヤ書 35:3-10、使徒言行録 3:1-10

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

今朝、この言葉を聴いて立ち上がった男の物語に聴きました。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

しかし、この言葉はこの男だけじゃない。ぼくたちを立ち上がらせてきた言葉です。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

イエスさまと一緒に立ち上がって歩もう。これまで礼拝の中でぼくたちが聴き続けてきた言葉です。もちろん今朝聴いたこの男のように、生まれつき足が不自由ではないかもしれません。でもこの男と同じように、神さま喜ぶ歩みを失っていたぼくたちを。神さまは、イエスさまによって喜んで立ち上がり歩むものとしてくださいました。

だから「今から立ち上がらないといけない」「歩かないといけない」。そんな風にこの言葉を聞かなくていいと思います。もうすでにぼくたちはイエスさまと一緒に立ち上がって歩んでいます。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

この言葉を聴いた男は生まれながらに足が不自由な男でした。だからこそ、神殿の境内に入る門の前で彼は「物乞い」をしていました。ぼくたちは、この男に「自分」を見いだしにくいかもしれません。なぜなら生まれながらに足が不自由でもなければ、物乞いもしていないからです。でも、そんな特殊な状況にないと聞けない話などではないんです。

「ああ自分の人生ってこんなもんだろうな」。

むしろ、この男が抱いていた思いは、こんな具合だったと思います。というのも、彼は40歳を過ぎていたからです。40歳を過ぎていたのは、この箇所より後で書かれます(4章22節)。

ぼくたちは「生まれながらに足が不自由で物乞いをして生活している」と聴くと。どこかで「かわいそうな人」だって思ってしまいます。しかし、これは往々にして起こりうることですが、当事者意識とズレがあります。もちろん人と比べて自分の動かない足を嘆いたこともあったと思います。でも、この当時、40歳というのは長寿の域に入っている年齢でした。だから、もはやそんな思いすら抱かなくなっているんじゃないかなと思うんです。それどころ、彼には自分を「毎日」神殿の門に運んでくれる人があたえられていました。だから孤独で悩んでもうダメって泣き

叫んでいるような人じゃない。むしろ、足は不自由だけど、40年自分を助けてくれる人が与えられている。そのことに感謝すらできたかもしれない。そんなこと思うんです。だから彼の抱く思いって、「ああ自分の人生ってこんなもんだろうな」。そういう言葉がちょうどいいように思います。

ぼくたちも、そんな感情を抱く時があるんじゃないでしょうか。

自分の境遇を嘆き、訴え、祈ってきた。「どうして、こんなことになるんだ！」と。でも時間と共に、そんな思いすら抱かなくなってしまう。嘆くことにも疲れてしまう。「どれだけ嘆いても何も変わらないんだから」。「それより生活することを考えなければ」。「むしろ生活できていることに感謝せねば」と。そうやって切り替えてきたと思います。

「ああ自分の人生ってこんなもんだろうな」って。

そんな思いにあるのは「諦め」です。自分のこの苦しい状況は何も変わらない。受け入れて生きるより他ない。もちろんそれは「前向きな切り替え」とも言えるかもしれませんが。でも、そこで失っているものがあります。それは「神さまを心から喜ぶ」ということです。時間と共に「神さまを心から喜ぶ」ことを失ってしまっている。神さまに期待できないし、「自分の人生」に期待できなくなってしまう。そんな心をこそ、この男の境遇と重ねるんです。だから、神さまの前に喜んで立って歩むことができなくなってしまう。信仰の足が萎えてしまっている。そんなことを、この男と重ねて今朝は聴きたいと思います。

そんな諦めのうちに「物乞い」をする彼は、二人の男と出会いました。

それが、ペトロとヨハネです。彼らは物乞いの彼に見つめられる。するとペトロは、ヨハネと一緒に「物乞いの彼」をじっと見つめ返して言うんです。「わたしたちを見なさい」（4節）と。いよいよ何かもらえるかと期待した物乞いの男に、ペトロはこういます。

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。」

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（6節）

……この箇所を読んでいて、疑問に思ったことがありました。

「ペトロとヨハネたちがこの男をなんで放っておけなかったのかな」ってことです。物乞いは、おそらく彼だけではなかったでしょう。それに、きっとペトロとヨハネはいつも神殿に通っていましたが、初対面でもなかったと思います。でも、このとき、ペトロもヨハネもこの男を放っておけなかった。

そこで思わされたのは、物乞いに「かつての自分たちの姿」を重ねたからじゃないかなってことです。彼が、かつての自分たちと「同じ眼差し」をしていたからじゃないかなって。それは、神さまに期待できない「諦めた目」です。ペトロとヨハネもまた、神さまに期待することができない。あるいはもう自分に期待することのできずに生きる。そういう「世界の暗さ」を経験した者たちでした。彼らが、いつ、そんな眼差しに生きていたか。それは、イエスさまの十字架です。

イエスさまが十字架で死なれた後、この二人が何をしていたのか。

そのことについては聖書に、いろんな描写がありますが、その一つに、故郷ガリラヤに帰って魚の漁をしていたって話があります。それは、つまり彼らが生計を立てるために生きてったことです。イエスさまに従いゆくために捨てたはずの「網」を再び手にとって漁をする。その「眼差し」には、諦めと虚しさがあったのではないかと思います。神さまのために生きるのではなく、金や銀のために生きる。そんな生活に彼ら自身が戻ってしまったからです。「ああ自分の人生こんなもんか」とそう思っていたかもしれません。神さまを喜んで歩むことなどできなくなっていた。そんな過去を、この二人ももっていたんです。だからこそ、この物乞いの眼差しを見て、彼を他人事には思えなかった。放っておくことはできなかつたんじゃないかって思うんです。見つめ合うこのやりとりから、そんなことを聴くんです。

そして、だからこの「わたしたちを見なさい」（4節）って言葉は、「わたしたちもかつて諦めていた者たちだった」ってことなんだと思います。決して「わたしたちの立派な信仰を見なさい」ってことなんかじゃない。だって、そんなの嘘ですもん。そんな立派な信仰などなかったから彼らはイエスさまを見捨てた訳です。だからこの「わたしたちを見なさい」（4節）って言葉は、むしろ「わたしもあなたと同じだよ」って聴いていいと思うんです。「あなたと同じで、神さまに見捨てられたと思って諦めていた者だよ」って。「金や銀をもって生きることしか考えられなくなっていた者だよ」そういう優しい言葉に聞こえる。

でもだからこそ、ペトロとヨハネはこの物乞いをしている彼になく自分たちにあるものを語る。それは「復活のイエスさま」です。自分たちを立ち上がらせてくださったお方を語っている。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（6節）。

そして、これも「立て」「歩け」ってことじゃない。「わたしもあなたと同じ。この方によって立ち上がらせていただいた。」「だから一緒に立って歩もう」。そう聴いていいと思うんです。

なぜそんな言葉に聞こえるか。

それはまさに復活のイエスさまこそが、そう弟子たちに呼びかけたお方だからです。もちろんイエスさまは「わたしたちを見なさい」とは言っていません。でもイエスさまは、復活されるとき、弟子たちに「ご自分の体」を見せられました。その手には釘で刺された傷跡、そして脇腹には槍で刺された傷跡がありました。そう。イエスさまが見せられたのは「かつて神さまに見捨てられたご自分の姿」です。つまり弟子たちに対して「わたしもあなたと同じだよ」ってことを語っておられたんです。

神さまから見捨てられるようなあなたの苦しみをわたしは知っている。神さまの前に喜んで立てなくなる苦しみをわたしは知っている。でも神さまは、あなたもわたしをも見捨てておられなかった。ほら、現にわたしは立って生きているでしょう。あなたもわたしと一緒に立ち上がって生きるんだって。

そうやって復活のイエスさまによってこそ立ち上がらせていただいた彼らだから伝えるんです。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（6節）

ここに復活のイエスさまの語りかけを聴きます。この言葉は「立て歩け」という言葉じゃない。

「一緒に立ち上がって歩もう」って言葉です。神さまの前に喜んで立てなくなる苦しみを知るイエスさまの言葉。神さまに諦めて生きることを知る者たちの言葉です。「そこからこっちへ這い上がれ」っていうんじゃない。「わたしも神さまに立たせていただいた。だから一緒に立ち上がろう」って。復活のイエスさまが手を引いてくださる。

ペトロは、この足の萎えた男の手を引いて立たせました。その手は、まさに復活のイエスさまの手です。復活のイエスさまの思いと言葉をもって、手を引いた。

ぼくは「この手を引いた」って言葉がいいと思うんです。ただの呼びかけ、声がけで終わらない。言葉だけだったらちょっと心細い。でも手を引くからこそ「一緒に立ち上がろう」って思いを感じます。そして、ここにこそ「教会の洗礼式」があると思います。

復活のイエスさまの思いと言葉をもって、神さまの前に立ち上がらせていただく。

「一緒に立ち上がろう」って手を引かれて立ち上がらせていただき。言葉だけじゃなくて「手」をもって。それが洗礼式です。この教会にこそ、弟子たちの手、イエスさまの手があるんです。キリストの体である教会の手をもって、ぼくたちは立ち上がらせていただいたんです。あの洗礼

式で、ぼくたちはイエスさまに手を引かれて立たせていただいた。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

神さまの前に喜んで立つことのできない苦しみ。悲しみ。痛み。悩み。それを知るイエスさまが、ぼくたちに語りかけてくださっているんです。「一緒に立って歩もう」って。いや。ぼくたちは、もうすでに「立ち上がらせていただいた」んです。だからこそ、ぼくたちの歩みは、もう一人じゃない。イエスさまに手を引かれて歩む歩みになりました。

この奇跡の物語は、足が癒やされたってことに目が向きます。

もちろん、足が治ったということは喜ばしいこと。でもそれはあんまり重要じゃない。だって、嫌な読み方をすれば、この男もいずれはまた立てなくなるんです。この男だってこの後「死にます」し、必ず「死んだ」のですから。だから「足が癒やされた」ということ自体は、そこまで重要じゃないんです。むしろ「神さまの前に喜んで立ち歩くものとされた」。神さまの前に立つものとされた。そのことこそが重要です。

ぼくたちの「悩み」も尽きません。

ひとつ解決したと思っても、またつぎつぎ襲ってきます。そして、ぼくたちの足もいずれは立てなくなります。でも、たとえが立てなくなっても。死んでも取り上げられることのない「喜び」がここに与えられているんです。だってイエスさまが手を引いてくださっているからです。ぼくたちは、イエスさまに手を引かれて、死を超えて歩む者とされたからです。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(6節)

痛みを知るイエスさまが手を取って引き上げてくださる歩みとなった。この喜びに、立ち上がり歩み直していきたくて願います。祈りましょう。

憐れみ深い天の父なる神さま。

悩み、悩み疲れ。もうあなたに期待することをやめ。諦めのうちに生きていたわたしたちの姿があったことを思います。でもイエスさまは、そこから無理に這い上がれとはおっしゃいませんでした。わたしもその苦しみを知らぬもの。一緒に立ち上がろうと手を引いてくださいました。イエスさまの名によって立ち上げていただいた自分たちを知ることができ、心から感謝いたします。どうぞ、これからもイエスさまに手を引かれているわたしであることを覚えて歩むことができますように。

主イエス・キリストの御名に祈ります。アーメン